

2022年度 特定非営利活動法人ピッコラーレ  
日本財団助成金事業完了報告書  
添付資料 事業内容詳細

若年妊婦の居場所及び若者向け保健室の運営

2023年4月13日



# ① 若年妊婦の居場所



# 事業の概要① 若年妊婦の居場所

## 事業の目的

幼少期から虐待や貧困、DVや精神疾患などを背景に、社会から孤立し適切なサポートに繋がることの出来ない10代20代の若年妊婦の存在が、全国の妊娠葛藤相談窓口を通して浮き彫りになっている。本事業では、そのような状況にある妊娠している女性に対し、医・食・住を提供する居場所型のサポートと、利用者のニーズに合わせて適切な支援機関や団体に繋いでいく相談支援活動を通して、居場所のない妊婦が安心して過ごすことのできる生活基盤づくりに取り組む。

今年度は特に安定的な運営を目指し、行政への事業化を働きかけていく。

## 対象者

ピッコラーレが運営する、妊娠葛藤相談窓口につながった居所のない若年妊婦及び行政から依頼された居所のない若年妊婦

## 事業期間

2022年4月～2023年3月31日

## 場所

東京都豊島区





# 事業の背景にある課題

## 居所のない妊婦の存在 ①

いつだってひとりだった

彼女たちは、妊娠するずっとまえから、  
いくつもの困難をかかえていました。

貧困



虐待・ネグレクト

家に居場所がない



安心できる居場所はどこにもなかった

だれにも気づかれず、だれかにSOSを出しても受けとめられず、  
やがて、SOSを出すことをあきらめ、ひたすら、ひとりでなんとか生きのびてきました。

# 事業の背景にある課題

## 居所のない妊婦の存在 ②

もっともハイリスクな特定妊婦は安心して安全な居場所がない妊婦

⇒ 妊娠によって居場所を失う・居場所がないから妊娠をする

特定妊婦は出産後の子どもの養育について出産前において支援を行うことが特に必要と認められる妊婦のことをいう（児童福祉法第6条3第5項）

⇒ 特定妊婦の背景

若年、被虐待歴、原家族が機能不全、支援者の不在、不安定な雇用、借金、衣食住の劣悪な生活環境、妊娠葛藤（思いがけない妊娠）、母子健康手帳未発行、妊娠後期の妊娠届、妊婦健康診査未受診、上の子の養育困難、DV、精神疾患など

特定妊婦は児童福祉法に定義されているが、児童福祉法を根拠法とする制度の中に特定妊婦のためのものはほとんどない

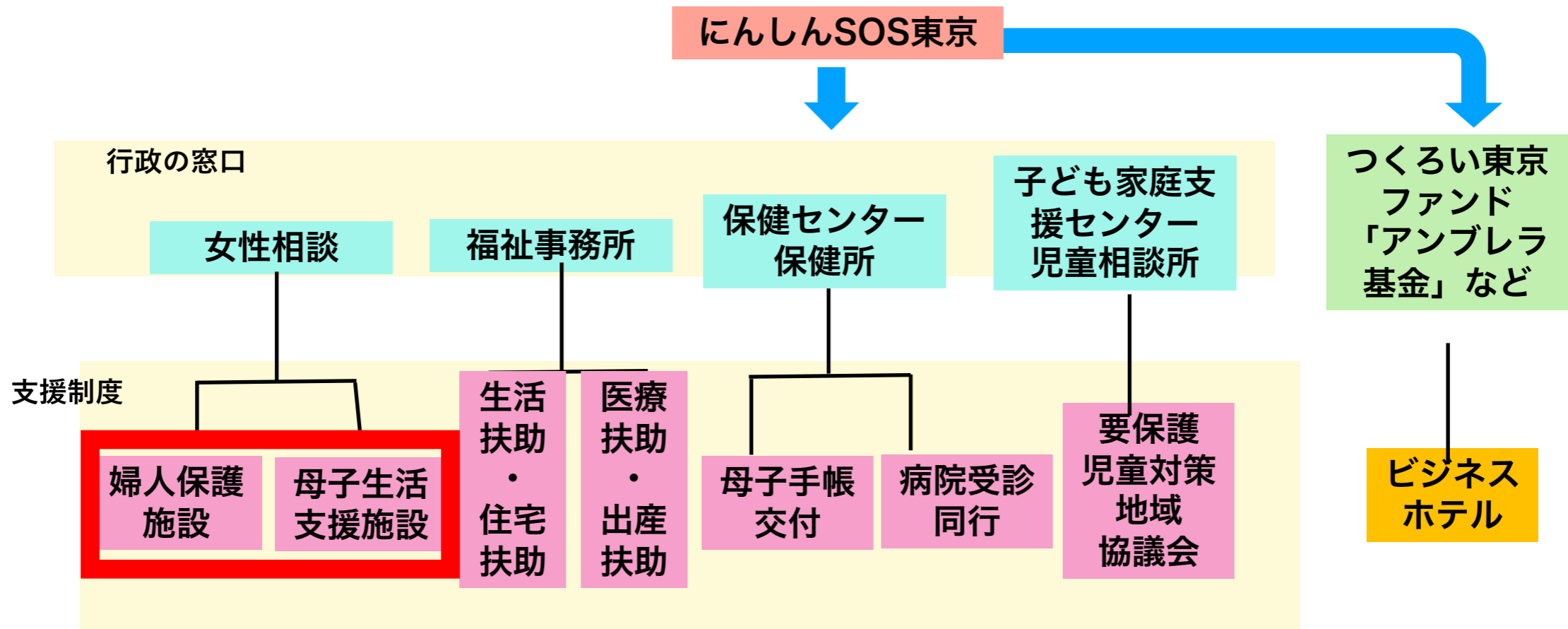
⇒ 居所のない特定妊婦が利用するのは売春防止法やDV防止法などを根拠法とする制度や支援



## 居場所のない妊婦に対する支援の実際 主に関係する行政窓口と支援制度（母子保健・福祉）

安心して安全な居場所がない妊婦は広域で居場所を点々としており支援に繋がりにくい  
妊娠によって居場所を失う・居場所がないから妊娠をする

⇒ 居場所のない特定妊婦が利用するのは売春防止法やDV防止法などを根拠法とする制度や支援







# 居場所事業



HOMEのない妊婦のための

## project HOME

居場所を失った若年妊婦に「いつでもおいで」と言えるHOMEを作りたい

project HOME はこんな場所

### 1 安心して 休息できる 場所



- 妊娠の週数に関わらず、いつからでも(つながったその日からでも)身を寄せることができます。
- 利用に費用はかかりません。また土日に関わらず利用できます。
- 妊婦さんに必要な衣類や衛生用品があります。
- 宿泊のできる個室が2つあります。
- 妊娠検査薬での検査をしたり、妊婦健診の受診や行政の窓口へ出かけるときはスタッフが同行することもできます。
- キッチンがあり、私たちと一緒に、あるいは個室で一人でも、食事をすることができます。その日に食べたいものを一緒に作ったり、赤ちゃんが生まれた後には離乳食を作ることもできます。
- Wi-Fiが使えます。ポケットWi-Fiや携帯電話の貸し出しもします。

### 2

未来のことを  
ゆっくり  
考えられる  
場所



- 勉強をしたい、アルバイトをしたいという場合は連携先の支援者につながることができます。また、勉強や仕事の間は、子どもを預けることもできます。
- 自分の身体や心のこと、避妊や妊娠のこと、パートナーのことなどを相談できます。 Condomも無料で提供しています。
- この場所を離れたあとの暮らしについて、スタッフと一緒に考え、必要な支援者と出会うことができます。

### 3

しんどくなったら、  
またSOSを  
出せる場所



- この場所を離れたあとでも、例えば子どもと二人きりの生活がつらくなったときなど、休息先として親子で宿泊したり、子どもを預けて一人の時間を作ることができます。
- いつ立ち寄ってもウェルカムです。話し相手がいる、仲間との出会いがあります。

\* \* \* NPO法人ピッコラーレ × 認定NPO法人PIECES \* \* \*





居場所

HOMEを持たない、漂流妊婦に安心と休息と希望を届けたい。

それが、project HOMEのミッション

ミッション1

居場所をもたない彼女たちに  
安心して安全に休むことのできる  
場所と時間を提供します。

ミッション2

彼女たちが抱えている困難を  
一つ一つ手放すことができるように  
一緒に考え支えます。



ミッション3

彼女たちが、  
社会と安全につながるできるように  
社会に希望が持てるように、  
いくつものつながり先を確保します。

ミッション4

彼女たちの存在を  
社会に伝え続ける発信地となります。



利用者  
数

延利用者人数

15名

リピーター含む 新生児・幼児  
6名含む

利用者  
年齢  
/10代  
の割合

平均年齢

20歳

16～25歳

10代の割合

63%

稼働日  
数/  
稼働率

延滞在期間

481日

稼働率

82%

ハイリス  
ク

妊娠後期（28週以降）

38%

広域連  
携の  
ニーズ

住民票東京都外

50%

関西・中国地方の方も

アフター  
ケア

デイ利用延利用者数

15名

延デイ利用回数@ぴさら アフターケア継続中のケース数

64<sup>10</sup>回

11ケース





# 1

## どんな選択をしても利用できる

「ぴさら」利用時には、まだその妊娠をどうするのか決まっていないことも多く、いくつかの選択肢の中から一つ一つ自分で決めていく、その過程で葛藤が生じます。「ぴさら」では、葛藤する過程を見守り支える伴走を、時にはスタッフも葛藤しながら行っています。また、その決断によって再び漂流してしまわないように、どんな選択をしてもそのまま「ぴさら」を利用できることを大切に運営しています。



「(どうしたいの?)って必ず聞いてくれる。どうしたいのか、うーんってなっても。それはちょっと他と違う。これまでは嫌だなんて思ってももう決まっちゃって。私には合わなかった。ぴさらではみんな、一瞬(うーん)って言って、どうしたいのか聞いてくれるよね」

# 2

## 地域に開かれている

シェルターではなく地域に開かれた場であり、地域の関係機関や支援者など、様々な人と出会うことができる場です。「ぴさら」での生活を通して、ピッコラーレ以外にも信頼できる頼り先が得られる機会を作っています。



「実家の代わりとして・・・。  
可能であれば、ぴさらで上の子の七五三のお祝いしたい。」



# 3

## 妊産婦とその家族を 対象とする

場合により、上の子やパートナー、  
ペットも含めた家族のサポートのニーズにも  
「ぴさら」は応えます。

「次の場所に行くけどさよならって感じがしない。  
はい、おしまいってならないんだなあって。  
だからまた困ったら連絡してもいいのかなって。」



# 4

## ピア的な支え合いがある

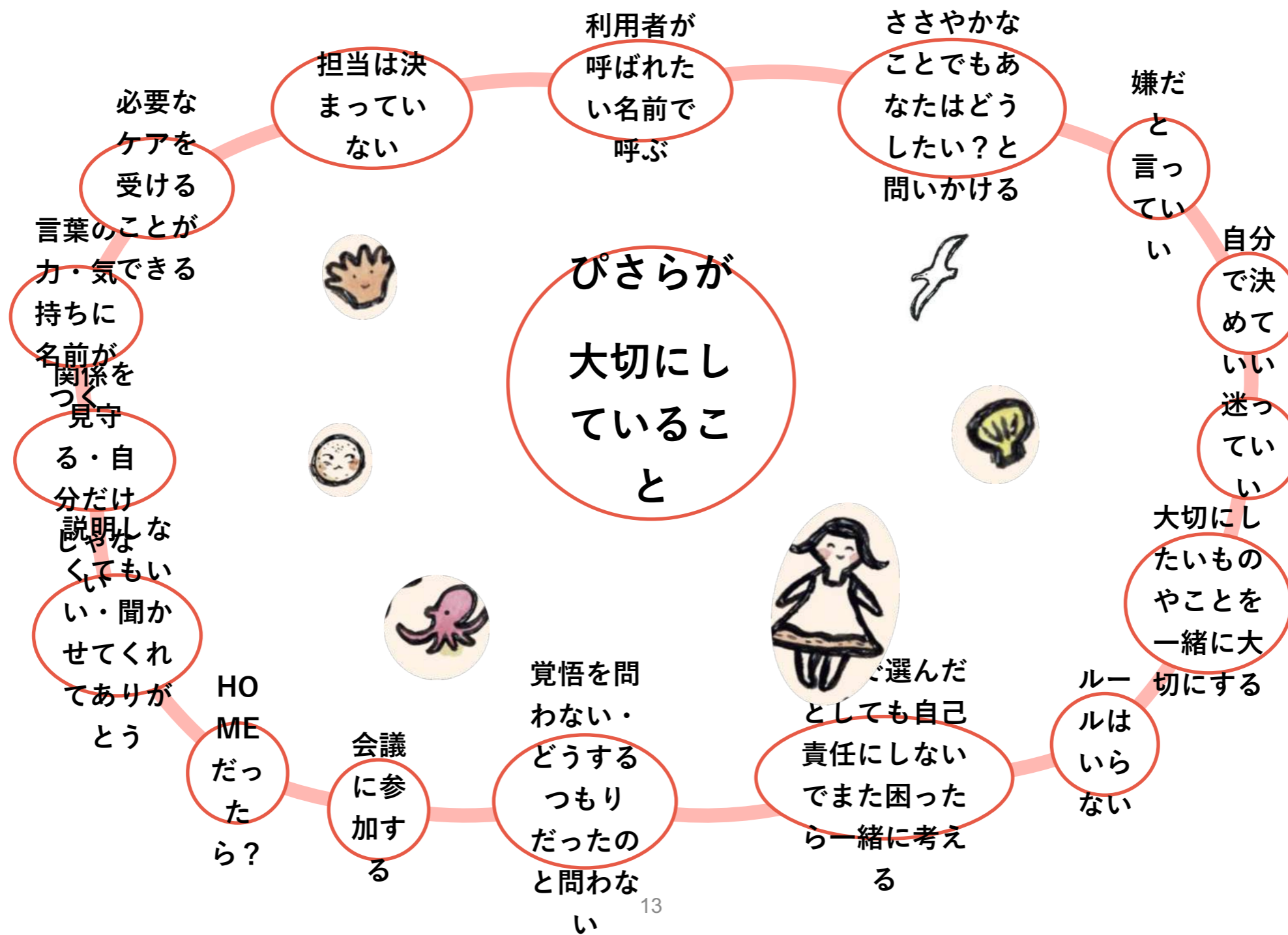
生活を共にする中で、当事者同士の関わりがあります。  
「ぴさら」には、彼らが時間と体験を共有しながら、  
様々な選択肢について知る機会があります。またかつての利用者が、  
「ぴさら」の運営に参画し始めることもうまれています。  
支援する側・支援される側という、二つの役割に固定化されない  
場や関係性づくりを大事にしています。

「Aちゃんがウェルカムパフェ!って、パフェ作ってくれて、  
それがとっても嬉しかったから。  
最初は部屋から出て行きにくかったけど  
それで大丈夫だった。だからBちゃんにも作る」





# 権利の主体は利用者 権利擁護を大切に ともにいる



## 活動を振り返って①

若年妊婦の居場所「ぴさら」の利用については行政からの問い合わせの件数が多く、現場でのニーズの高さを感じながら1年間運営をしてきた。令和6年度の児童福祉法の改正の中で若年妊婦の居場所の制度化が努力義務になるが、どこに住んでいたとしても妊婦を孤立させないために早急に各地域に取り組みを広げる必要がある。

「ぴさら」の運営は3年目に入り、卒業生たちのデイ利用やショートステイなど、「里帰り」のニーズが高いこと、また生活のさまざまな場面で必要となる手続（保育園申請・高卒認定試験申込や各種書類の提出、電話の契約など）においてサポートのニーズがあり、それらに応えるため連携先と連絡調整をしながら対応をする必要がある。

若年妊婦が中絶をしたとしても出産をしたとしても、自分自身で育てる場合もそうでない場合でも、それまでに抱えてきた困難を手放し自立して生きていくには長い時間を要する。若年妊婦の一時的な居場所での滞在は数ヶ月であり、その期間の中で叶うのは「安全な生活」「安全な出産」が精一杯という課題があり、ピッコラーレが掲げているビジョン、「にんしん」をきっかけに、誰もが孤立することなく、自由に幸せに生きていくことができる社会の実現のためには、地域のさまざまなステイクホルダーと連携しながら、ピッコラーレとしても「アフターケア事業」として別途立ち上げる必要があることを感じている。



## ② 若者向け保健室の運営



# 事業の概要② 若者向け保健室の運営

## 実施内容

出張保健室、カフェ 性教育など

a. 保健室カフェでの避妊やy通ぜつに関する相談窓口（月1回程度）

b. 地域の若者の居場所（学校含む）や

アフターケア事業者の拠点へ出張保健室（月3-5回）

## 事業期間

2022年4月～2023年3月31日

## 場所

東京都豊島区ほか

中高生センタージャンプ東池袋、長崎@豊島区（ぴこタイム

<https://www.city.toshima.lg.jp/257/kosodate/kosodate/hokago/jump/025456.html>

クローバーハウス@さいたま市浦和区

## その他

生理用品やコンドーム、妊娠検査薬の配布、緊急避妊薬処方のための同行受診など



# Project HOMEのイメージマップ

## 相談

- 妊娠・出産について
- 家族について
- これからの不安・迷い
- 中絶について など

## 就労

- 希望に沿った働き方のできる仕事
- やってみたい仕事 など

## 保健

- コンドーム
- 妊娠検査薬
- 生理用ナプキン
- 町の保健室
- 性教育
- カウンセリング など

## 食事

- 好きなものを食べられる
- 好きなものをつくってもらえる
- 料理の仕方を覚えられる など

## 仲間

- ピアサポート など

## 学習

- 落ち着いて学ぶことができる
- いつでも教えてくれる人がいる
- 学びが仕事につながる など

## 福祉

- 関連行政への繋ぎ
- 民間団体との連携
- ネットワーク会議 など



## オープンで、社会と安全につながる場

シェルターのように閉ざされた居場所ではなく、地域に開かれ多様な関係者が出入りをしている場。さまざまなネットワークが生まれる場。





## 中高生の間に妊娠についての学習がもっと必要

- 子どもたちは決して安全な社会の中で生きているわけではない
- 自分を守るための、人権・セクシャリティ教育をもっと学んでおくことが必要
- 教えないということは、妊娠した場合、妊娠にも気が付けず、出産をしなくてはいけなくなり、からだにも心にもかなりの負担をかけることになる
- そして、自分を守れないばかりか、乳児遺棄の問題も起きれば、その子は犯罪者になってしまう これは、教育の問題でもあり、社会の課題である

意図しない妊娠というのは起こるもので、すべての若者は健康やウェルビーイングに必要なサービスや保健にアクセス可能であるべきである

国際セクシャリティ教育ガイダンス

キーコンセプト8 妊娠避妊のキーアイデアより引用

## ★2022年度の活動

出張保健室・出張講座を中心に来所型のぴこカフェも実施

(1) ぴこカフェ：24回の実施 のべ211人が参加

(2) 地域の若者の居場所（学校含む）やアフターケア事業者の拠点へ出張保健室

|               |     |         |
|---------------|-----|---------|
| 豊島区中高生センター    | 12回 | 88人が参加  |
| wakuwakuホーム   | 11回 | 115人が参加 |
| 社会的養護アフターケア施設 | 11回 | 60人が参加  |
| 児童養護施設        | 1回  | 4人が参加   |

合計のべ267人に対して、35回実施した

(1)(2)合わせて478人、59回の実施

## 活動を振り返って②

学校での性教育が十分な時間を使って実施されていないことから、若者だけではなく、支援者であるおとなも性の知識に対する不足を感じており、子どもたちから相談をされたり、問題が起きても、その対応に苦慮されている現状がある。

若年者においては、正しくない情報の方が先に入ってきてしまって、性に対して経験してみたいという興味関心が高い人と、性に対して、ネガティブな感情が強く、あまり考えたくないと感じている人との格差が起きている。性に関心があっても、実は、知識は不足していて、わからないままに、性的な欲求にまかせて行動を起こしてしまっている人、言葉は知っていても、よくわかっていない人等さまざまである。また、自分の身体に無関心であったり、リアルなからだや人との付き合いが苦手であったり、親からの虐待を受けて育ってきた人の場合は、自分の身体を大切にするという気持ちが不足していることもあり、それぞれに課題はあるものの、自分自身では、知識が足りないとか、性のことを相談してみようと思っているわけではない。

女子においては、月経がいつ来たか、周期がどのくらいであるか、なども、考えたことも、記録したこともない。という人、そもそも、なぜ月経が起きるのかわからないという高校生もいる現状がある。そのため、自分から相談に来るといよりも、支援者に声をかけられ来てみたり、何気なく、話をする中で、その人にとって、知っておいたり、考えておいた方が良いことに気が付いていく場となっている。自ら相談に来られる人は、すでに、問題が起きていたり、自分の状況を聞いて欲しいと思って、出張保健室の開催日を待っている子もいる。このような「話を聞いて欲しい子ども」も一定数いる。人との関係性、恋愛、親やきょうだいとの関係など、日常におきている困難さを吐き出せる場がなく、自分が行く居場所に定期的に訪れる私たちのような存在の人が丁度よい距離感であると感じてくれているのではないかと思う。

このような子どもたちが普段過ごす居場所における、ノンフォーマルな気軽に性や困りごとについて話ができる場の必要性を感じる。